

M I B社

神経接続サービス提供か

武蔵野美大過去講座等と連携

M I B社は9日、神経接続技術を用いた新サービスを年内に開始すると発表した。

M I B開発部による「タブレ(TABURE)」は、人間の神経系とコンピュータを結合する神経接続技術で、一部の識者による強い反対運動のなか、製品化に踏み切る形になる。神経接続はこれまで、筋肉や感覚器官と脳のやりとりを介し、医療分野や、災害救助の分野で活用されてきた。タブレは、運動や感覚だけでなく情動や既視感を直接伝達できるのが特徴で、商用への糸口をつかめるかどうか注目されている。

M I B社は2011年、武蔵野美術大学基礎デザイン

学科、早稲田大学文化構想学部、東京大学情報学環を卒業した仲間数名が起業し、意表をつくアイデアで急成長した。近年は米グーグル社買収の噂も流れている。

M I Bによれば「TABURE」応用技術開発は、システムアーティスト安斎利洋に依頼し、同氏が2009年に担当したゼミや講義の学生数十名のワークショップによってくりひろげられた思考実験の成果であるという。

未来の企業が過去の大学に研究を依頼する時間差産学連携は、全国でも始めて。なぜ過去の大学機関と連携が可能になったかについて、M I B会長は「彼らは来てもない

注文にこたえるくらい、わけありません」と語った。

M I B会長はまた「社会的に有益な技術だけでなく、反社会的な製品企画も含め、あらゆる可能な世界を抽出してもらった。反社会的なアイデアを募ったのは、われわれ自身が技術に飼われなければならないための予防的対抗措置である」とも語り、暗に競合他社の暴走をけん制した。

新製品とサービスの詳細は明らかにされていないが、M I B会長は「すべて準備はできている。なにしろ、2009年10月末に仕上がっている」と成功への自信を見せた。

解説 タブレのもたらすものとは

M I B社のタブレ(TABURE)は、近年実用化がいつているB M I (Brain-machine Interface) の一種。これまでB M I技術は、欠損した感覚器や運動機能を代替するリハビリテーション医療技術、また遠隔ロボットや装着可能ロボットなどを拡張された身体とする災害救助・軍事への応用が主流であった。それに対しタブレは、一般人を対象とするはじめての商用B M Iである。タブレはまた、喜怒哀楽といった情動の入出力が可能で、喜びや悲しみを脳から読み、脳に送ることができるとの特徴。M I B社から公開されているタブレの仕様は、現在のところ以下のみだ。

- ・脳の情動系から電子信号を引き出すことができる。
- ・脳の情動系に電子信号を与えることができる。
- ・装着離脱が容易である。

M I B社広報の談話によれば、タブレは「ほぼ非侵襲的(ひしんしゅうてき)」で「ヘッドフォンのように着脱ができる」。情動の種類や範囲について明らかにされていないが、「快、不快、安心、怒りといった基本的な感情を高速に読み取り、書き込むことが可能」だという。ただし「記憶、認知、意欲といった領域にも作用が及び、既視感、共感覚、幽体離脱、臨死体験などに作用が及ぶ場合がある」という。その効果の範囲については、専門家もM I B社も完全に把握していない。

タブレは、ケータイネットワークの標準入出力デバイスとして登録でき、既存のA Rディスプレイや感覚アクチュエータと連携、あるいは置き換えが可能になる。いままでにない形で、感情のネットワーク化が実現することになる。

情動に作用するB M Iの研究は、これまで「被るドラッグ」として忌避されてきた。一方で、これを熱烈に支持する業界もあり議論を呼んできた。あるメディア論者は「これまで人間が安定的に築いてきた人と記号との関係を、根本から揺るがすことになるだろう」。広告、エンターテインメント、宗教、芸術のありかたが問われることになる。それは、破壊的であると同時に構想的で、哲学の実験になることは間違いない」と語っている。(A)